

浅間山火山防災に関する 説明会が開催されました

去る10月24日、住民の方および防災関係者の方を対象として、「浅間山火山防災に関する説明会」をエコールみやたあつもりホールにて開催し、約250名の方が来場されました。

今回の説明会は、今年8月に「浅間山融雪型火山泥流」のマップが公表され、御代田町の広範囲に影響を及ぼす可能性があることが示されたことから、多くの地域住民の皆さまに、融雪型火山泥流をはじめとする様々な火山現象と防災対応について、理解を深めていただくことを目的として開催したものです。

説明会では、3人の先生方から浅間山の火山防災に関する講演をいただきました。

はじめに、荒牧重雄 東京大学名誉教授から「浅間山の噴火の歴史と火山災害について」という演題で講演いただきました。

講演では、噴火の仕組みや種類の解説、現在に至る浅間山の活動史、天仁・天明の大噴火でどのような被害

があったのかなどについて、科学的資料や古文書資料、写真などを交えて詳しくお話しいただきました。また、火山はマイナス面ばかりではなく、観光資源などでプラス面もあるということも、お話しいただきました。

次に宮下誠 気象庁浅間山火山防災連絡事務所長から「浅間山の火山災害と防災対応について」という演題で講演いただきました。

講演では、融雪型火山泥流発生の仕組みや発生事例などをお話しいただいたほか、主に明治以降の浅間山の噴火と現在の浅間山の活動状況の解説、噴火警戒レベルと融雪型火山泥流避難の心得を含めた防災対応などについて、写真や防災マップを交えて、詳しくお話しいただきました。

最後に、儘田勉 国土交通省利根川水系砂防事務所防災対策推進官から「浅間山火山防災マップについて」という演題で講演いただきました。

講演では、これまでの浅間山火山防災マップ作成の経緯とそれぞれのマップの相違点(どのような点が改

正されてきたかなど)についてお話しいただいたほか、融雪型火山泥流マップ公表の経緯、マップシミュレーションを行うにあたっての計算条件などについて、防災マップやイメージ図を交えて、詳しくお話しいただきました。

来場者からは、融雪型火山泥流が発生した場合の避難の方法や、どのような形で情報が流されるのか、といった質問が出されました。

今回説明会を開催するきっかけとなった融雪型火山泥流が、御代田町に被害を及ぼす可能性は、かなり低いものですが、もし、融雪型火山泥流が発生した場合には、発生から居

住地までの想定到達時間が15分〜30分と短いことから、町からの情報提供の前に泥流が到達してしまう可能性があります。

このような中、町では東日本大震災での津波被害や原発被害を受け、可能性のある災害については、予め住民の皆さまに情報を提供し、正しい知識を身に付けていただくことで、いざ災害が発生した際に、住民の皆さま自らが適切な対応を取っていただくことが大切だと考えています。

今回説明会でお配りしたマップなどの詳細は、役場総務課でご覧いただけます(お渡しいたします)ので、お気軽にお越しください。

融雪型火山泥流イメージ図



説明会で出された質問

(抜粋)

Q マップで示された融雪型火山泥流の範囲については、火砕流も同じと捉えてよいのか？

A 融雪型火山泥流と火砕流の範囲は同じではありません。説明会で示したマップは中規模噴火を想定しているため、火砕流は全て4km以内の範囲に収まります。(居住地には影響ありません)しかし、融雪型火山泥流は、火砕流が雪を溶かし、居住地まで泥流として流れ下りますので、影響する範囲は異なります。

Q 融雪型火山泥流は川に沿って流れるのか？

A 融雪型火山泥流は低い所を流れます。川ばかりではありません。融雪型火山泥流が発生した場合、流れに対して直角の高台に避難してください。

Q 住民への情報伝達手段は？

A 現在、防災行政無線を整備しているところであり、平成24年4月から運用を開始する予定です。運用開始までは、オフトークによる放送や区を通じた情報提供など、今ある手段を使って、できる限りの対応を行います。

融雪型火山泥流とは？

雪が浅間山山頂付近に積もっている時期に、高温の火砕流などが発生すると、雪が溶け、土砂、火山灰などと一緒になって、斜面を高速で流れ下る現象で、流れる泥流の速度は時速60kmにも達します。

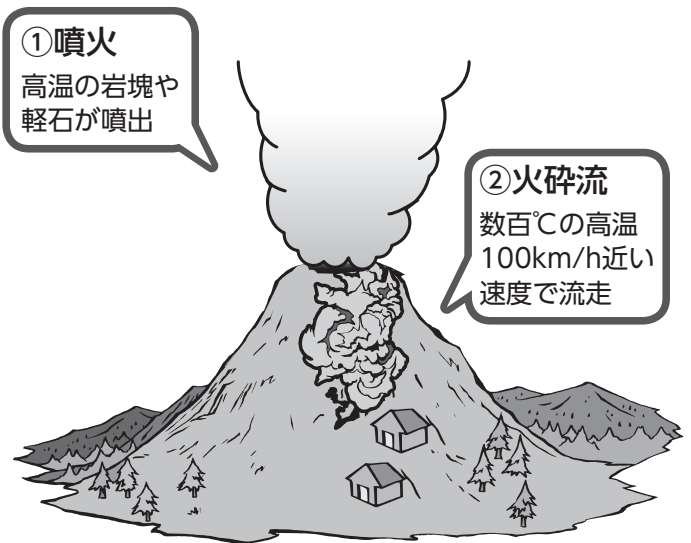
火砕流とは？

火口から噴出した高温の岩塊、火山灰、軽石などが高温のガスと混合し、それらが一体となって、地表を流走する現象です。火山の噴火にもなっており、地下のマグマが液状の溶岩として低地へ流出する溶岩流とは異なります。

融雪型火山泥流避難に関する心得

- ・ 沢筋や低地など、危険度が大きい地域では、早めに避難をする。(自らの判断に基づく自主避難をする)
- ・ 危険箇所を通らず、泥流の流れに直角に、近くの高台など、高所に避難をする。
- ・ 近くに高台など、高所が無い場合は、泥流の力に耐え得る、丈夫な建物に避難をする。
- ・ 屋外に泥流が到達している場合、または、すぐそばまで迫っている場合は、屋外には出ず、建物の2階以上に避難をする。

火砕流イメージ図



講師紹介

荒牧重雄 氏 (東京大学名誉教授 山梨県環境科学研究所所長)

火山学の権威として国内外に広く活躍され、また、浅間山火山研究では第一人者として、浅間山ハザードマップ検討委員会委員長なども務められています。

宮下 誠 氏 (気象庁浅間山火山防災連絡事務所事務所長)

浅間山に関する火山観測や火山防災に関する知識の普及・啓発活動、浅間山周辺自治体との連絡調整業務に携わられています。

儘田 勉 氏 (国土交通省利根川水系砂防事務所防災対策推進官)

浅間山、草津白根山の火山防災マップ作成や、噴火による泥流・土石流災害などの対策事業に携わられています。

問い合わせ先

総務課庶務係(内線24)